

第11回 双葉町復興推進委員会 議事概要

■日 時：平成26年10月9日(金) 午後1時00分～4時00分

■場 所：双葉町いわき事務所 2階大会議室

■出席者：別紙座席表のとおり

■議事概要

1. 開会

2. 町長あいさつ

3. 議 事

(1) 双葉町の復興の絵姿について

資料 2-1・2-2・2-3・2-4・3に基づき、事務局より説明後、質疑。

委員の主な意見は以下のとおり。

- 資料によると、山から盛土のための土の移動が必要になってくるとのことだが、どの地域で、何 m くらいの盛土を想定しているのか。
- 長期ビジョンで町内復興拠点を整備するにあたり、土地の所有についてはどう考えるのか。
- 外部要因の変化はどう考えるのか。双葉郡の他の町でも同じような計画を作っている。双葉郡の中での双葉町の役割を考えていかないといけない。長期ビジョンで「廃炉やロボット産学施設の誘致」などを書いてあるが、他の地域でも記載しており、取り合いになる。他の地域が実施するとできなくなるものもある。
- 長期ビジョンと中間貯蔵施設の地域や距離、位置などの関係はどのように考えるか。
- まちなかに公園や林、森などの緑がある場所があったらいい。「町並みに緑」というよりは、子供達がのびのびと遊べる大きな公園のような場所がほしい。作ってはどうか。
- 寺沢地区には果樹園があった。双葉町の特産物もできそうな気がする。寺沢地区における一大プロジェクトも考えたらいい。
- 山の活用ができないのか。石熊地区の目玉になるような開発はないか。山に遊歩道を作る、なども考えられる。
- 長期ビジョンの内容は良いことばかりであり、悪いことは描いていない。双葉町で提案したものが 40～50 年かかっても、我々がいなくなっても、いつ実現できるのか分からない。莫大なお金と時間が必要である。
- 広野町・檜葉町・富岡町・浪江町は復興が進んでいるが、大熊町・双葉町は進んでいない。大熊町と双葉町は特殊な地域ということを発信・アピールをする必要がある。希望を失った部分の代償を国や県に求めてほ

しい。

- 計画があっても時間は過ぎていく。仮設住宅の入居者はあと一年もしたら復興公営住宅が出来る前に自分の家を作る。一番心配していることは、町民が避難先などの地域に根を張り、双葉町がなくなることである。
- できることを進めて欲しい。計画は大事であるが、実際には2年や3年ではできない。10数年後に「この部分はできた」という証を求めている。
- 長期的な復興計画は本当に町に帰りたい人に向けて作っていくべきである。また、双葉町出身者でない人にも訴えるものでもあるべき。どのように発展するのか、という希望を持ちながら進めることだ。
- 町を発展させるために産業は重要である。それには、産業で働く人がいなければならない。全国から来てくれればよいが、さらに前進することを考えるならば、教育の場を作るべきではないか。子供達がいらない町は発展しにくい。中学からその次につながるような教育機関を国の力で作っていくべきである。イメージでは学園研究都市で放射線の専門家を育てるべきだ。
- 立派な構想であり、できるのであれば、どんどんやってほしい。しかし、この構想はいつから始まるのか。10年経ったら線量が下がるのか、生活出来るレベルなのか、判断できる情報が出てこない。
- 恐らく町民は戻らないだろう。今も大半が戻らないと聞く。これから産まれた人は、30年後は30歳であり、委員もその時点ではない。この構想も分からない。ペーパーの計画だけでは役に立たない。そこから考えないといけない。
- 計画は立派であるが、まもなく修正する段階になるのではないか。中間貯蔵施設が双葉町・大熊町にできると、双葉町・大熊町のイメージは「核のゴミ捨て場」となってしまう。連日各地からダンプカーで運んでいる姿を見たら、特に若い人は、帰るというイメージはなくなる。
- 大熊町・双葉町は置かれた状況が違う。マイナス点をプラスにする発信が必要である。良いことばかり書いてしまうと、南相馬市や広野町で実施しているものと同じにとらえられてしまう。双葉町は放射能の被害があるため、やりたいのだけれどもできないのだ、という事をなぜ書けないのか。良いところと共にマイナス点を書くべきだ。
- 「避難先等との二地域居住も可能とする」とあるが、お金の理由で本当は戻りたいが戻れない、という人に対しての配慮はあるのか。仮に中間貯蔵施設ができるとなると、線量が低くても小さな子供を持つ人、線量に敏感な人などは住みにくい。隣接している方に対するフォローなどは

どう考えるか。

- 10月3日の衆議院の予算委員会で、内閣総理大臣が浜地区の計画として、新産業のゾーンと公園のゾーンについて述べたようだ。東京オリンピックを見据え、観光客が訪れる可能性があるためゾーンを計画して進める、という内容と記憶しているが、こういう話は実際にあったのか。
- インターチェンジから町内への（長期ビジョンに書かれた）幹線道路については、広い意味で産業道路として使うという目的もあるが、有事の際は避難道路として使う。震災時、お粗末な避難状況であった。こういった教訓は生かし、有事の際の避難の周知方法を検討しなくてはならないのではないか。復興が進んだ場合に、双葉町や周辺は作業員が大勢入る。そのような人に向けて、有事の際の周知方法を検討する必要がある。
- 計画は素晴らしいし、あくまでも計画なのでこれでよい。委員が質問しても町からの回答は「その時になってみないと分からない」ということであれば、この計画を早く発表してほしい。その際、着手期、具体的な年数を早く明らかにしてほしい。さらに中間貯蔵施設の工程表も計画と一緒にいれてほしい。
- 一番言いたいのは、双葉町外の復興拠点をいわき市以外に、県外に1つ、県内に1つ作るように進めて欲しいことである。
- 町の復興を絵姿にしたのは大変素晴らしい。希望を持つことは大切だ。目に見えるものが一番大切である。町内の家屋解体については、被害状況をきちんと調査し、除染してから始まる。除染が一番大事である。
- 長期ビジョンについては、将来に向けての計画としては素晴らしい。これから中間貯蔵の問題もあるので、長期ビジョンを語りつつも「ビジョンが実現できないのであれば、こうなる」ということも同時に平行して、検討する必要があるだろう。
- 複雑な気持ちで意見を聞いていた。中間貯蔵施設ができる「ふるさと」であると、30年間双葉町に帰れないということでの長期ビジョンだと思う。大熊町等で作る施設とだぶらない施設を考えてほしい。
- 両竹地区・浜野地区の小委員会ではどのような話が出ているのか。
- 津波被災地域復興小委員会が復興推進委員会に先行するわけにはいかない。全体の委員会が先にあり、そこで全体のビジョンが示されてから小委員会が開催される。
- 長期ビジョンについては素晴らしいと思う。何年かかっても実現してほしい。中間貯蔵施設は、双葉町か大熊町で受け入れざるを得ないだろう。受け入れれば、六ヶ所村の例にもあるように最終処分場になり、新しい町づくりをしても、町民は戻ってこないと思う。

- 強く計画長期ビジョンの実行を県と国に働き掛けることで、町内復興拠点施設建設の可能性は高い。放射線が低い地域はいち早く実行に移ることで足がかりが見える。将来計画をしっかりと決める事が重要である。まずは計画を決めて、国や県に働きかけ、早めに着工することが何より重要である。
- 時間軸を検討する上で、前提となる条件は自分たちでは判断できないので難しい。しかし、長期的な姿については皆さんに了承いただいていると認識しているが意外に時間がない。現実の町外拠点も含めた話については、生活再建との兼ね合いを考えると、現実の生活と町の復興を結びつけて作らなくてはならない。
- 共同墓地の整備はできるだけ早く進めて欲しい。お墓参りで、町に通うことになる。そこからではないか。
- 町を新しく再生するにあたり、景観に配慮していくことが大事である。
- 町内拠点を作るにあたって線量の低い場所を選定しているが、その間に線量の高い川のような形をした地域がある。2つの線量の低い地域をどうつなぐかが大きな問題になる。線量の低い地域をつなぐということを明示し、思い切った除染をしっかりとする必要があり、技術的に裏付けをした上での検討が必要である。
- 復興シンボル道路が町の計画の軸になる一方で、J R 双葉駅と道路の関係はどうか。できれば直結した計画を作るほうが新しい復興の町を作るという意味では重要だ。同時に J R にも積極的に働きかけるべきである、と思うのは、双葉駅の駅舎と線路が町の市街地を東西に分断しているからである。J R と一緒に双葉駅の東と西を積極的につなぐということをしなくてはならない。新しい双葉町らしさを残した町並み、ランドスケープにするかを盛り込んだ方がよい。
- 今回の計画は何年経っても実現させるということであるが、「双葉町に帰る」という方向性として考えた方がよい。社会情勢が変わると計画も変わる。
- 双葉町しかできないことについて手を上げる必要がある。アーカイブセンターがそうである。重要なのは早く手を上げることである。土地が確保できなくても計画を作ることが重要である。
- 中間貯蔵施設ができて 30 年戻れないことはない。中間貯蔵施設は、完全に密封した施設である。その上に立ったとしても、 $0.6\sim 0.7\mu\text{Sv}$ くらいの低い線量になると思う。
- 構想について紙で議論していてもわからないので模型を作って欲しい。
- 資料については、町民にはいつ渡される予定なのか。

- 「中間貯蔵施設ができるから帰れない」ということについて情報が独り歩きする。私たちも情報不足だ。専門家ではないのでわからないのは当然だ。町からタブレットが配布されたがそれを利用し、中間貯蔵施設について、町民に理解できるような知識を伝える必要がある。
- 可否が決まった後の話かもしれないが中間貯蔵施設が返還された 30 年後の土地利用などについて、町民自身はどうするかを考えてもよいのではないか。
- 未来都市ができた時に双葉町を動かす人は新しい人たちだ。新しい町を動かす人たちに、今の町民のふるさとに対する思いを託す、という気持ちで、今の人たちが関わっていくことが必要である。
- 特に高齢者は、一時帰宅しても休むところが無いために連れて行けないということになってしまう。しかし、そういう人ほど行きたいのだ。一時帰宅した時に行ける休憩所、みんなで集える場を一番初めに作ってほしい。

4. 閉会

以上

第11回双葉町復興推進委員会座席表

(敬称略)

高野 間野
陽子 博

- 1 日時 平成26年10月9日(木)
13:00～16:00
- 2 場所 双葉町いわき事務所 2階大会議室

課長 駒田 義誌	事務局 (復興推進課)	町長 伊澤 史朗	齊藤 六郎
課長補佐 細澤 界		副町長 半澤 浩司	菅本 洋
主任主査 橋本 靖治		教育長 半谷 淳	
副主査 山下 明弘	事務局 (復興推進課)	総括参事 武内 裕美	岩元 善一
主事 西牧 孝幸		総務課長 船来 丈夫	大橋 正子
支援員 米山 治介		秘書広報課長 平岩 邦弘	
支援員 山中 啓稔	事務局 (復興推進課)	税務課長 山本 一弥	岡村 隆夫
支援員 由波 大樹		産業建設課長 猪狩 浩	小畑 明美
支援員 小山 勲		住民生活課長 松本 信英	
議会事務局長 山下 正夫		生活支援課長 志賀 睦	山本 真理子
会計管理者 半谷 安子		健康福祉課長 大住 宗重	高田 秀文
		教育総務課長 今泉 祐一	

芥川 一則	復興庁 八木 俊樹 企画官
大月 敏雄	復興庁 石川 義浩 参事官補佐
丹波 史紀	復興庁 福島復興局 高橋 直人 次長
長林 久夫	復興庁 福島復興局 高橋 忠信 参事官
相楽 比呂紀	復興庁 福島復興局 須田 亨 参事官補佐
小川 貴永	福島復興局 いわき支所 林 文之 次長
谷 充	福島復興局 いわき支所 桃原 信明 参事官補佐
川原 光義	福島県 避難地域復興課 佐藤 庄一 総括主幹兼副課長
	福島県 避難地域復興課 駐在員 熊坂 雅彦 副課長
	福島県 避難地域復興課 根本 朝彦 主査